

第34回泌尿器科漢方研究会学術集会

会長： 寛善行(香川大学医学部泌尿器科学教室)

会期： 2017/6/17 ～

会場： コクヨホール(東京都)

ワークショップ

座長： 順天堂大学 堀江 重郎
東名古屋病院 岡村 菊夫

5. 癌薬物療法中の慢性疲労に対する漢方薬の効果

大阪市立大学大学院医学研究科 泌尿器病態学

○玉田 聡、二宮 典子、仲谷 達也

【目的】 癌の治療は飛躍的に進歩しているがその恩恵の影で、疾病の慢性化（長期化）や、患者の高齢化が進み、癌治療には様々な不定愁訴も伴うようになった。特に抗癌剤治療の継続、長期化により疲労を訴える患者は多くなり、それにより治療を中断せざるを得ないこともしばしば経験する。例えば前立腺癌はアンドロゲン除去療法により病勢コントロール可能となっている疾患であるが、治療により疲労を訴える患者は多くなる。一般的な疲労は通常、休息により回復するが、癌患者においては、治療の長期化、先行きへの不安などから、全く異なる疲労の形態が見られると考えられている。その実情に関しては少数の研究はなされているものの、病態解明には至っていない。さらに疲労の評価もアンケートによる解析のみで科学的に裏付けされたものはない。そこで我々は疲労を定量化し、その発症メカニズムを探った。

【方法】 まず癌治療中の患者はその他の患者に比べ疲労しているのかどうか検討した。コントロール群として癌が完治しフォロー中の患者23名と、癌治療中の患者37名を対象とした。これらの患者を自律神経活動測定器を用いて疲労の測定を行った。次にホルモン療法もしくは抗癌剤治療中の前立腺癌患者と、転移性腎癌に対して分子標的薬を投与中の腎癌患者35名を対象として加味帰脾湯を投与する前後で疲労度の測定（自律神経活動測定器、VAS, Chalder fatigue scale）、不安（Center for epidemiologic studies depression scale (CES-D)、酸化ストレス (derivatives of reactive metabolites (d-ROMs), biological antioxidant potential (BAP), an index of antioxidant activity) 不眠 (Epworth sleeping scale (ESS), Pittsburgh Sleep Quality Index (PSQI)) の評価を行った。

【結果】 癌治療中患者は治療後の患者に比べて、自律神経活動測定器による解析で疲労していることが判明した。癌治療中の患者に加味帰脾湯投与すると、自律神経のバランス、Chalder fatigue scale, CES-D, ESS は改善した。また酸化ストレス d-ROMs は減少し、抗酸化ストレス BAP も改善した。

【結論】 癌関連疲労は自律神経のアンバランス、酸化ストレスにより引き起こされ、それを加味帰脾湯は改善し、疲労を軽減させる可能性が示された。